

＜前回＞エコロジーの神学2

(1) メタファー論：新しい認知の生成・経験の転換、構想力・感性から実践へ

(2) モデル論

1. 言語世界／心的世界／実在世界（日常性・生活世界など）／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。
 - 語／隠喩／テキスト：言語の諸階層1→連辞
 - 隠喩／モデル：言語の諸階層2→範列
2. モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩（root metaphor）を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。
4. モデルの特性として
 - ①モデルの複数性（まず現象学的に確認・記述され、次に理論的に＜存在論的に＞相互に位置づけられ関連づけられる）
 - ②モデルの複数性→神経験の複数性
 - モデル・レベルの非排他性・相補性（多様性の承認）と概念レベルの排他性
 - cf: 人格と非人格（ヒック）
 - ③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格（男性モデル）
5. 神モデル：人格モデル / 非人格モデル
 - 男性モデル / 女性モデル
 - 王モデル／父モデル
6. 人間モデル（自然との関わりにおける）：「地の支配者」と「地の僕」
 - 人間の实践領域・倫理

(3) エコ・フェミニズムからケアの倫理へ——マクフェイグの場合

Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.
 , *The Body of God. An Ecological Theology*, Fortress, 1993.
 , *Super, Natural Christians. How we should love nature*, Fortress, 1997,

1. モデル→思想と倫理（概念と実践）

・伝統的モデルと新しいモデル

The Monarchical Model

The World as God's body

we have been given central responsibility to care for God's body, our world. (1987, 73)

The immanence of God in the world implied in our metaphor raises the question of God's involvement with evil. (74)

・神モデル：母、愛する者、友→三重の愛

To say that God is present in the world as mother, lover, and friend of the last and least in all creation is to characterize the Christian gospel as radical, surprising love. (91)

All three loves --- creative, salvific, and sustaining --- are united in that each points to a desire for union.

2. モデルに基づく生の形態化→実践

A Christian lifestyle modeled on God as parent, lover, and friend

3. 自然の神学：神学的な自然理解→自然観の転換

(1)新しい感受性へ：構想力（Einbildungskraft）のレベルでの転換から、存在（Sein）のレベルでの転換へ

A new shape for humanity, a new way of being in the world

We are as members of God's body qualified by the liberating, healing, and inclusive love of Christ. (1993, 197)

to change consciousness, to develop a new sensibility,

thinking differently, behave differently

each model contains within itself a way of being in the world. (203)

(2) 創造の善性：人間から被造物全体へ拡張

The ecological model says that the self only exist in radical interrelationship and interdependence with other and that all living and nonliving entities exist somewhere on this continuum. In other words, everything is in some sense a "subject" ---- an entity that has a center, a focus, an intention in itself, for itself (often an unconscious one), but it also at the same time in radical relationship with others. (2)

The basic model in the West for understanding self, world, and God has been "subject" versus "object." Whatever we know, we know by means of this model: I am the subject knowing the world (nature), other people, and God as objects.

nature has become the object par excellence. nothing but object (7)

hierarchical dualisms: male / female, straight / gay, whites / people of color,
Westerners / Easterners

The first named is the subject, the second the object.

Objects are "things" (8)

西欧ヒューマニズムの功績と限界、たとえばカントはどこに位置するか。

(3) 「自然」とは？ 自然の問題は自然観の問題となる。

Im sum, a Christian nature spirituality is Christian praxis extended to nature. It is becoming sensitive to the natural world, acknowledging that we live in this relationship as we do also in the relationships with God and other people. It means extending the way we respond to God and other people --- as subjects and not as objects --- to the natural world.

as valuable in itself, as a "subject" (25)

subject-object & subject-subjects

(4) 注意と愛

(5) 二つの目（視線）のあり方

two very different ways of seeing the world (30)

the loving eye" versus "the arrogant eye." (32)

(6) ケア倫理：権利とケア

an environmental ethic of care

A rights ethic seeks to extend the rights accorded to human beings since the Enlightenment --- the right to "life, liberty, and the pursuit of happiness --- to all animals and even forests, oceans, and other elements of the ecosystems. A rights ethic functions on the model of the solitary human individual.

A care ethic is based on the models of subjects in relationship, although the subjects are not necessarily all human ones and the burden of ethical responsibility can fall unequally. The language of care --- interest, concern, respect, nurture, paying attention, empathy, relationality --- seems more appropriate for human interaction with natural world, for engendering helpful attitudes toward the environment, than does the rights ethic. (40)

The subject-subjects model is counter-cultural: it is opposed to the religion of Economism, to utilitarian thinking, to seeing the world as for me or against me.

Christianity is not easy religion. (41)

モデル論の射程：実践領域の分析・再編

↓

<前期：キリスト教思想と宗教哲学(2) ——「解放の神学」系の思想から——>

13. 経済と環境

(3) 環境学と経済学の相関関係

11. 経済学との関わりにおける環境の神学。

・サリー・マクフェイグ「神の家政——キリスト教、経済学、そして地球上での生き方」。

現代世界において競合関係にある二つの世界観。

「新古典的な市場モデル」：食欲のイデオロギーに従って、経済成長という目標設定を伴った消費社会を目指す。

「エコロジー的経済モデル」：相互依存の信条を掲げ、地球の持続可能性という目標を伴った正義の社会を目指す。

マクフェイグによれば、現代のキリスト者、特に北米の中産階級のキリスト者は、前者のモデルに囚われてしまっているが、本来キリスト教は、後者のモデルを採用すべきなのである。

・経済学と環境学の相関関係：

環境危機と経済活動との緊密な関わり、「経済学」(eco-nomics)と「生態学」(eco-logy)のいずれもが「家」(oikos)という共通語源に遡及すること。

・しかし、聖書には、そしてキリスト教には、「富みに対する統一見解など存在しない」。したがって、マクフェイグの言う「エコロジー的経済モデル」をキリスト教的経済モデルとして正当化することはできない。

これは、マクフェイグ自身指摘している通り。これを認めた上で、マクフェイグは、キリスト教的環境論(環境の神学)の視点からエコロジー的経済モデルを採用するよう提案する。⁽³⁾

「エコロジー的経済モデルは、キリスト教的経済学ではない。むしろ、それはかすかに、イエスの神の国の徹底的な包括性と開かれた食卓に類似した経済モデルなのである。」(なお、神の国における「開かれた食卓」については、クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社、を参照)

12. エコロジー的経済モデルと、聖書的思想との関連。

前回、山本栄一『問いかける聖書と経済』との関連で紹介した「スチュワード」としての人間理解。山本は、創世記2章のエデン物語から、他者と共に生きる人(「彼に合う助ける者」という人間理解を読み取る。

「人間の生き方は、この共同体におかれている人間の任務が優先されるのであって、個々人が自ら自由に選択できるのではない。その任務は『スチュワード(steward)』といわれ、主人の財産を忠実に管理する『執事』『家令』といわれるものである。」

「人は、自然に対しては、既に『エデンの園』でそうあったように、神からの『所与』として与えられたものを、生きていくための資源として利用しながら、『自然』全体を神からの創造の意図に従って『良く管理』し、財産として『保持し守っていく』ことを任務として持っているのである。」

13. 他者との相互性において共に生きる人間、エデンの園を管理するスチュワードは、環境論的含意をもつ存在者として捉えられている。

経済と環境の二つの問題を聖書的人間理解において相関させるという議論の組み立ては、キリスト教思想において広く共有されている。

14. スチュワードという経済的環境学的な人間理解は、キリスト教神学の問題領域に限定

されないさらなる広がりをもつ。

・パスモア『自然に対する人間の責任』:「自然との関係において本質的に専制君主」である人間という理解を否定するものとして「スチュワード精神」を位置づけ、それを西欧文明を構成する次の三つの伝統の中に見いだしている。

まず、自然を神聖なるもの・神的なものとして崇敬する自然=神秘主義の伝統、

次に、自然を完成させるために人間を協力者としてみる伝統、

第三が、「世界の世話をまかされた神の代理人として実質的な責任を有する『スチュワード』(農園管理者)として人間を見る伝統である」。

・パスモアは新約聖書の見られるスチュワード精神(第1コリント4章1節など)は教会に関するものであり自然との関係性にまで直ちには拡張されないと主張するが、キリスト教的なスチュワードとしての人間という理解は、西欧文明の中で多様に展開し現代に至っており、聖書的な視点から、人間の経済的活動(経済)と人間の自然との関わり(環境学)とを結びつける可能性を有している。

<文献など>

- (1) 環境の神学の歴史的展開については、芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年、特に「第七章 自然神学と環境論」(231-262頁)を参照。また、環境の神学の全体像については、次の論集を参照。Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000.
- (2) David G. Horrell, Cheryl Hunt, and Christopher Southgate, *Greening Paul. Rereading the Apostle in a Time of Ecological Crisis*, Baylor University Press, 2010.
- (3) Sallie McFague, “God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living,” in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002, pp.119-136.
- (4) 「エコロジーと宗教」をめぐる最新の動向、特に宗教的諸伝統の動きを把握するには、次の研究便覧が便利である。Willis Jenkins, Mary Evelyn Tucker and John Grim (eds.), *Routledge Handbook of Religion and Ecology*, Routledge, 2017.

5. 環境・経済・政治

- ・「エコロジーの神学」における、環境・経済・政治の相互連関。
- ・事例としてのカトリック教会における「環境の神学」。

- (1) 韓国カトリック主教会議 正義平和委員会環境小委員会編纂、
『創造秩序回復のための私たちの責任と実践—環境に関する韓国カトリック教会主教会議指針書—』(ソウル:韓国カトリック中央協議会、2010年)

3.2 社会における実践

46. (すべての信者たちの生態使徒的参与)

カトリック教会が現代社会に肯定的影響を与えることのできる道は、何より信者たちが積極的に社会生活に参与するところに見出しえよう。信者たちは日常生活において神の御心を実践し、神の愛に対して証をすることにより効果的に社会の変化と発展に寄与することができる。同様に、創造秩序の正しい回復のためにも信者たちは生態使徒職に積極的に参与しなければならない。

3.2.1 職業による多様な役割

47. (政治家)

カトリック信者である政治家は、誰よりも大きな責任の意識を持たなければならない。民主社会において権力は国民から出てくるが、信仰的に見る時、権力の主人は究極的には神である。したがって、信者である政治家は、国と国民に影響を与える決定について、国家と国民だけではなく究極的に神の前で責任を負えなければならない。信者である政治家は、基本的にカトリックの社会教説を学ばなければならず、創造秩序の回復のために具体的にどのような政策が必要なかを常に考えるべきである。政治的な党利党略よりも信仰的实践と責任完遂を優先視するべきである。そのために、カトリック信者である政治家たちは、良心により創造秩序を施された神の御心を求め、その御心を実践するための助けを謙遜に請わなければならない。

48. (公務員)

公務員は国民の公僕として、私たちの錦水江山が汚染され破壊されないように忠実に任された任務に就かなければならない。清廉に正直に国家と国民に奉仕できる有能な公務員に生態危機克服の大きな責任も同時に与えられている。公務員の使命は、根本的に国民の慰安のために奉仕することであり、カトリック信者である公務員たちも生態系破壊へと国民の生活の質が低下しないように常に見守り、神の創造秩序が透徹されるよう力を尽くさなければならない。

49. (科学者)

教会は、科学がもたらした驚くべき成果を高く評価する。科学者たちは、神が下さった能力によって創造の神秘を学問と研究の対象とみなす者たちだ。したがって、自身の能力が神の創造の道具として使用されるように謙虚な姿勢を示さなければならない。そうしなければ、科学がかえって神の創造を破壊する道具と転落してしまうからだ。しかし、現在のように生態系危機に直面し人類は科学者の寄与に大きな期待をしていることも事実だ。化石燃料の枯渇により親環境の再生エネルギーの開発は、未来の世代のための大切な希望を与えるためだ。汚染と破壊を減らしたり、なくすことのできる新しい科学技術の開発だけではなく、温暖化と異常気象などにより発生する自然災害に備えるための科学者たちの努力が求められる。神が創造された地球と宇宙の神秘について人間が知っている知識は、それこそ氷山の一角にすぎない。それほど私たちは創造の広大な神秘をいまだに知ることができない。科学者たちは、創造主なる神の神秘を私たちの近くで表してくれる「伝令」である。

50. (教育者)

人間の世の発展は、教育の力によってなされるといっても過言ではない。この時代の最大関心事が生態系危機であり、その克服と言ったとき、教育が担当しなければならない役割は大きい。結局、正しい教育の結果が時代的課題を解決する能力を養ってくれるためだ。したがって、創造秩序の回復の重大性と当為性を悟らせる持続的な教育が重要だ。それゆえに、幼い時から大人になるまで、教育のすべての分野を担当する人々は時代的課題である生態危機の克服のためいすべての教育的力量を動員しなければならない。各種形態のカトリック保育園、幼稚園、小・中・高等学校と大学で従事するカトリック信者の教育者は、創造秩序の回復のための教育的先鋒であるという重大な使命が与えられている。

51. (労働者)

人間は労働を通して自己完成と発展を図るだけでなく、神の召しに応え、神の創造の業に

協力者として参与する。すなわち、労働においてこの世の統治権を委ねられた「神の似姿」としての人間の位相がよく現れる。この点を忘れ、人間自らが創造主のように行動するならば生態系危機をもたらすだろう。したがって、カトリック信者である労働者は、自身が労働し流した汗水が神の創造の業のための一種の「奉献」であることを認識し、祈る心で働かなければならない。もしも自分の労働の結果として生態系破壊が明らかに予見されるならば、そのような労働は拒否されることこそ良心の求めるところである。自身の労働がこの世と人類の発展に貢献できる仕事なのかどうなのかについて限りない分別が必要であり、これに必要な知識と知恵は一次的にカトリックの社会教説を勉強することにより、そして祈りと良心の省察により得ることができる。

52. (企業家)

企業を所有したり、経営したりする人々は、労働者たちと同様に、神の創造業の第一線にある働き手である。しかし、今日の企業の生産活動は、生態系破壊と密接に関連している。生産活動の直接的結果として空気と水と地が汚染されることは一度や二度ではない。したがって、企業家たちは、良心的に生態系保護のための法を遵守し、自然の破壊を防止したり最小化できるすべての方法を求めなければならない。生産のための原材料獲得過程で間接的に発生するすべての環境破壊(これは今日世界化された市場経済の枠の中からはしばしば発生する問題)を排斥しなければならない。またそのような材料や商品を輸入してはならない。自身が生産したものが生態系に否定的な負担を与えることなく、少なくともそのような否定的結果が最小化されるように、管理にまで徹底しなければならない。短期的な利益の極大化だけを求めるために私たちより経済的に困難な国の人々の生態的人権を踏みにじり、その国の生態系を破壊し、その結果として生産された製品を何のためらいもなく利益追求の手段として取り引きすることは破廉恥なことだ。カトリック信者である企業家たちは、カトリックの経済倫理を熟知し、創造秩序回復のためのカトリック精神を先導するカトリックの社会教理を必ず学ばなければならない。

53. (農業者、漁業者)

現在、農村の現実は困難である。我国の食料自給率は深刻な状態で、農業に従事する農家の比率も最低に落ち、大部分が高齢化している。そして、工場や住宅、道路などの建設により農地が急速になくなりつつある。一言で、農業と農民が衰退の線上にあり、韓国の農業の未来が見えない。しかし、このようななかでも、少数にすぎないが心ある人たちが農業を再開し生態有機農業の種をまき、命脈を受け継いでいることがまだ幸いなことである。彼らは、化学農産物や農薬に漬けられた輸入農産物に対抗できる私たちの農産物の耕作と普及のために献身している。政府や教会も農村を生かすために総力を傾けなければならないが、農家自らも命の農業を通して直接的に神の創造の業の働き手となるという自負と召命の意識を強化する必要がある。

漁業家の場合も農業者に比べ大きく異なることはない。日に日に汚染される川と海は、清浄水産物と海産物を供給することを大変困難にする。また、枯渇する魚種と温暖化によって生じる海洋環境の変化は、漁民の生存をより困難にしている。しかし、漁師であったイエスさまの最初の弟子たちを思い出しながら、漁業の活動が神の創造された川と海に創造の神秘と直接対面でき、その収穫物を揚げる神聖な仕事であることを再度強調する。したがって、カトリック信者である漁師も神が創造された川と海を守る「僕」として自負し、仕事をしなければならない。

54. (自由業者)

自由業に従事している人は人口全体の15パーセントとかなり高い。食堂、スーパー、製菓店、宿泊施設、洗濯所、美容室、理髪店、カラオケ、インターネットカフェなど自由業の種類は多様だ。大概の場合、販売やサービス業種が主流で、それほどたくさんの人たちが直接接待する職業分野といえることができる。環境と関連してもそれだけ影響力と波及効果が大きい。ゆえに、自由業に従事する

人々が透徹した環境意識持っているのか、そうでないのかによって彼らが相手する顧客たちは互いに相反する影響を受けることとなる。自由業の中で最も高い比率を占める食堂をはじめ、宿泊施設や洗濯所、そして美容室や理髪店などは特に環境問題に敏感な業種と言える。

広がる飲食料と使い切り用品の使用を減らし、水を節約する方法を追及し、オゾン層を破壊しない親環境スプレーを使うことのように、経営に支障がでない程度に細かに気を遣うならば、生態系を守るのに大きな役割を果たせる。自然業者たちが多くの人を相手にしている点において、生態の霊性を持った自然業者たちは、創造秩序の回復の見張りとなり生態精神を吹き入れる教師の役割をすることができる。我が国の自然業者の大部分が零細で劣悪な条件の中で稼業を受け継いでいる現実を考慮するならば、環境問題まで気を遣うことは決して容易いことではない。しかし、稼業が単に金を稼ぐための手段ではなく、神に仕え隣人に奉仕する愛の手段として信仰の行為の延長線上にある。したがって、自然業者たちが創造秩序の回復を考えることは、選択事項ではなく信仰的義務でもある。重要なことは、自身の業種から何を実践できるのかをまず探してみる心であり、それを神に対する愛としてささげることができるだろう。

3.2.2 宗教間の協力

55. (他宗教との協力)

生態危機は人類と地球上に存在するすべての被造物が共同に当面する問題である。この危機の前では宗教間の違いも無意味である。生態危機の破局は、すべての宗教が等しく直面するものだからだ。したがって、生態危機を克服するために宗教家の相互協力も重要だ。もちろんここで困難が全くないわけではない。例えば、自然への接近がカトリック信仰とは全く異なる場合がそうだ。自然崇拝の汎神論的立場や人間とその他被造物の間にある違いを否定し両者を対等の存在としてみる場合などは宗教間の概念的合意に至るのに障害物として作用することもある。しかし、一次的に宗教間の教理論争が目的ではないゆえに、互いに通ずる共通点に注目する知恵が必要だ。ちょうどすべての宗教を貫通する共通の関心事が「命の価値」、「生命尊重思想」、そして「平和」である。このような価値のためには同じ目標の下に集まることができる。このような方式で宗教間の違いを超え、互いに協力するという私たちは生態系危機を克服するために一層強力な相乗効果を期待することができるだろう。教皇ヨハネ・パウロ2世が1986年10月27日にアシジで世界の主要宗教指導者を招待し、平和のための祈禱会を開催したことが良い例である。生態系危機という共同の問題を解決し、被造物間の平和を実現するために宗教間で協力することはこれからおより一層広がる様子だ。私たちがこれからどのようにすればより効果的に宗教間の連帯と協力を導くことができるのかを熟考しなければならない。

56. (他教派との協力)

また、私たちは教会一致の次元で他の伝統のキリスト者たちとも積極的に協力しなければならない。教区だけでなく、地域と本堂次元でも生態問題は分裂した教会の信者たちと連帯することができる良い契機を準備してくれるため、このような機会を積極的に活用することが望ましい。このような契機を通して韓国カトリック教会が隣人とこの世に向かって一層開放的で対話する姿勢を堅持できるようになるだろう。

3.2.3 市民団体と国際機構の役割

57. (市民団体の役割)

生態的で持続可能な社会をつくるには市民団体の積極的参加が必修である。教会は市民社

会の一員として生態的価値を社会的に拡散するのに直接参与したり、市民団体の環境運動を支援してきた。少なくともカトリック信者が市民団体の環境運動に積極的に参与しているが、教会は情熱的に共同の善のために奉仕している彼らの努力を高く評価する。神のすべての被造物が人間と平和に共存するこの世のために献身する彼等を、教会は積極的に支持し支援するものである。

58. (国際機構の役割)

1992年のリオ「UN環境開発会議」を契機に国際社会はUNを中心に環境分野でさらに積極的に努力を拮げていった。特に、気候の変化の問題に対処してUNは、気候の変化に関する国際基準制定と履行に格別な努力を傾けた。教会は、UNなど多様な国際機構を活用して物質主義と貧困を克服し平和を増進するのに命と生態的価値の重要性を強調してきた。環境破壊の超国家的性格と地球的次元の環境危機を考慮する時、政府と市民社会の地域的、地球的協力は、進むほど重要となっている。教会がこのような国際社会の協力を増進するのに積極的に寄与し参与することが、これまでのどんな時よりも重要である。

(2) 教皇フランシスコ『回勅ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』(カトリック中央協議会、2016年。原著、2015年)

第一章 ともに暮らす家に起きていること

第二章 創造の福音

第三章 生態学的危機の人的根源

第四章 総合的なエコロジー

第五章 方向転換の指針と行動の概要

第六章 エコロジカルな教育とエコロジカルな霊性

「聖ヨハネ二十三世教皇」、1963年の回勅「『パーチェム・イン・テリス——地上の平和』」
「地球規模でのエコロジカルな回心」

「ベネディクト十六世」「成長モデルの訂正」

「聖フランシスコは、傷つきやすいものへの気遣いの最良の手本であり、喜びと真心をもって生きた、総合的な（インテグラル）エコロジーの最高の模範であると、わたしは信じます。」(16)

「教会の社会教説」(21)

第一章

「人間環境と自然環境はともに悪化します。」(45)

「真のエコロジカルなアプローチは、つねに社会的なアプローチになる」(46)

「多国籍企業」

「国際政治における反応の鈍さは注目に値します。環境に関する世界サミットの不成功は政治がテクノロジーと金融とに屈服していることを明らかにします」、「経済とテクノロジーの結託」「形だけの宣言、継続性のない慈善事業、見せかけだけの環境配慮アピールばかり」(51)

第二章

「善意あるすべての人にあてて認められたこの文書」、「科学と宗教は、それぞれに独自

のアプローチで現実を理解しながら、双方に実りをもたらす中身の濃い対話にはいることができるのです。」(57)

「信仰と理性のさまざまな総合」「そうした総合の代表が、教会の社会的な教えの発展であり、その教えは、新たな挑戦にこたえることによって、さらに豊かなものとなるように促されています。」(58)

「創造の科学」「聖書の物語から学ぶこと」「神の計画」(59)

第三章

「近代の人間中心主義」(104)

「相対主義」「使い捨て」の論理」(110)

「人間を排除しない総合的なエコロジー」「労働の価値」(111)

「修道生活の偉大な伝統」「祈りと霊的読書を肉体労働と結びつけ」、「共同体の中で生活する」(112)

「バランスの取れた賢明な判断」「新たな光をもたらしうる自律した学際的研究」(120)

「倫理から切断されたテクノロジー」(121)

第四章

「危機の人間の側面と社会的側面を明確に取り上げる総合的なエコロジー」(122)

「環境危機と社会危機という別個の二つの危機ではなく、むしろ社会的でも環境的でも或る一つの複雑な危機」、「解決への戦略は、貧困との闘いと排除されている人々の尊厳の回復、そして同時に自然保護を、一つに統合したアプローチを必要としています。」(124)

「経済学を含むさまざまな学問分野を結集させることのできる、より全人的で統合的な展望に資するヒューマニズム」(126)

「文化的なエコロジー」

「エコロジーは、環境問題の研究にあたって、専門的な科学言語と民衆の言語との対話を大事にし、地域文化により大きな関心を払うよう要求します。」(128)

「単なる技術的解決には、症状への対処はしても、伏在するより深刻な問題への対処はしないというリスクがあります。」(129)

「一文化の消失」(130)

「日常的エコロジー」

「自分の部屋で、自分の家で、自分の職場で、そして近隣地域で、そして環境を用いて自らのアイデンティティを表します。」(131)

「ヒューマン・エコロジー」

「都市における生活の質」(135)

「自分の身体を受け入れ、大切に、その十全な意味の尊重を学ぶこと」(137)

「総合的なエコロジーは、社会倫理を統一する中心原理である共通善の概念と不可分なものです。共通善とは、「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」のことです。」

「国家は、共通善を保護し促進する義務を負っています。」(138)

「共通善からくる貧しい人々のための優先的選択」(139)

「世代間正義」「共通善の概念は、将来世代をも広く視野に収めるものです。」(139)

「世代間の連帯は、任意の選択ではなく、むしろ正義の根本問題なのです。」(140)

「ポストモダンの世界にいるわたしたちは、奔放な個人主義のリスクを冒しており、多くの社会問題は、刹那的な満足感を追求する現今の自己中心的な文化と結びついています。こうしたことは、家族と社会的きずなの危機、また他者を認めようとしないうちに中にか

がえます。」(142)

第五章

「金融危機」(163)

「市場の盲信」(164)

「現今の格差」(165)

「政治と経済は、貧困と環境悪化を扱う際、互いを非難しがちです。双方が、自身の誤りを認め、共通善に向かう種々の相互作用を見いだすことが望まれます。」(169)

「忍耐と自己鍛錬が求められる対話の海へと漕ぎ出すこと」(172)

第六章

「ライフスタイルの変化は、政治的、経済的、社会的権力を振るう人々に働きかける健全な圧力をもたらしました。」(176)

「新しい習慣」(178)

「責任をとる者へと」(179)

「エコロジカルな回心」

「共同体の回心」(186)

「心のあり方」「姿勢」(192)

「愛の文明」(195)

「母マリア」(204)